

＜視察先＞ 南河内農と緑の総合事務所（富田林市）

■ 日 程

平成30年9月21日（金）13:00～15:40

■ 調査事項

- ・南河内いちごの楽園プロジェクトについて
- ・南河内管内における6次産業化を通じた地域活性化について
- ・台風21号の被災状況について

■ 調査目的

南河内地域における「農」を通じた地域活性化に向けた取組について調査を行うとともに、台風21号によるハウス倒壊現場の視察を行う。

■ 調査結果

【説明内容】

○南河内農と緑の総合事務所

1 「南河内いちごの楽園プロジェクト」の概要について

- ・南河内農と緑の総合事務所では、平成29年度から南河内をいちごの産地にしようとして取り組んでいる。
- ・南河内管内では、数多くの農産物を生産しており、その栽培面積は、ブドウが羽曳野市、太子町及び大阪狭山市で200ヘクタール、梨が30ヘクタール、いちじくが羽曳野市、藤井寺市で30ヘクタールとなっている。いちごは、まだ2ヘクタールほどであるが、担い手の育成を目指して事業を進めているところである。
- ・「公民農」の連携によるいちごをターゲットとした地域活性化モデルを構築し、農作物関連産業の活性化と人口の拡大を目指す。なお、「公」は大阪府と市町村、「民」は企業、「農」はJAや農業者を指す。
- ・現在、千早赤阪村の人口は約5600人。1985年の7700人以降、急速に減少している。このため、地域の魅力向上のためにいちご狩り、食育ツアーを進めている。
- ・取組の背景は、ここ数年で40歳前後の農業経営者3名がいちごの販売を拡大したことにより、各地から大勢の方々が千早赤阪村の直売所に採れたてのいちごを買い求めに來られた。この地域は、金剛山のミネラル豊富な水によって高品質いちごの生産が可能となっている。いちごは1反あたり600万円程度の収益が見込める高収益型農業であり、大手デパートも大阪産（もん）を高級お土産として注目し販売している。海外観光客の増加によって、インバウンド観光の受け皿として、いちご狩りが各地で大盛況となっている。
- ・道の駅「かなん」では、料理教室を開催したり、レストランのリニューアルなどを行い、相乗効果が期待されている。
- ・取組目標は、定住人口の増加を目指し、新規就農者を16名確保、いちご観光農園を20農園とする。また、交流人口の増加を目指し、料理教室やいちご狩りの参加者を年間約8000人見込み、2億円の経済効果を創出することを挙げている。
- ・取組を推進するため、河南町、千早赤阪村、大阪南農業協同組合、大阪府南河内農と緑の総合事務所により「南河内いちごの楽園プロジェクト推進会議」を開設した。また、連携団体として生産者による協議会「ちはや姫の里」を開設し、共同でいちごのブランド化を推進している。
- ・具体的な取組として、次世代人材を育成する「いちごアカデミー」を開設した。昨年度、若手就農希望者を対象に募集したところ、約100名から問い合わせがあり、20人を面接し6名を採用、現在、月4日（座学1日、実習3日）研修を実施している。また、来春から就農できるよう、就農計画の作成を補助し、農地をあっせんする。なお、今秋から、第2期生の募集を開始する予定である。
- ・機運を盛り上げるために、「南河内いちごの楽園SWEETSフォーラム」を開催した。いちごの美と健康面の効果をモデル・野菜ソムリエがトークセッションでPRするとともに、河南町と千早赤阪村産いちご（1粒40グラム以上のいちごに限定）のブランド名を「ちはや姫」と発表した。ブランド名「ちはや姫」は、昨年12月に公募を行って採用したもので、試験販売期間では、ちはや姫8個を3800円で販売した。
- ・今後、いちご狩りプラスアルファを楽しめるインバウンド対応の観光として、ここにしかない観光いちご農園を展開する。道の駅「かなん」では、いちご狩りやいちごを使った料理教室など幅広いターゲットを対象に観光事業を進めている。

- ・このプロジェクトに関して、りそな銀行など13社の民間企業に協力していただいております、テレビ、ラジオ、新聞等、マスコミに大きく取り上げていただきました。
- 2 南河内管内における6次産業化を通じた地域活性化について
- ・南河内農と緑の総合事務所では、地元で採れる大阪産（もん）を使った6次産業化の商品開発の推進や、生産者と消費者との間のネットワークづくりの支援を通じ、就農者所得の向上、就農者の経営規模拡大を目指している。
 - ・具体的な目標としては、大阪産（もん）加工品の販路拡大による農業振興・地域活性化、農業者の所得向上、直売所の売上向上等を目指している。
 - ・管内の6次産業化の現状は、6次産業化を目指す農業者数が農業者（個人）15名、農業団体7団体となっている。生産した農産物の加工は、自ら行っている者もいれば、外注している者もいる。販売については、直売所やスーパーへの卸売に加え、ネット販売をしている農業者もいる。
 - ・具体的商品としては、富田林市では、ブルーベリージャム、大阪ナスで作ったみそ、いちごコンフィチュール、河内長野市では、ジャム、フルーツソース、乾燥果実、ぶどうジュース、ワイン、羽曳野市では、ぶどうジュース、ジャム、ワイン、藤井寺市では、バジルソース、ハーブオイルなどがある。
 - ・農業団体として、複数の農業者が合同で6次産業化を行っているケースも多い。商品開発については、6次産業化サポートセンターを通じて加工技術支援を行っている。販路拡大の支援としては、平成25年より農業者と食品関連事業者をつなぐマッチング商談会を開催しており、今年度で6回目となる。14件の農業者と34件の販売者が参加予定となっている。また、農産物のPRをするためのPRシートの作成を補助している。

【質疑応答】

Q：ふるさと納税では、どのようなものを返礼品として扱っているのか。

A：各市町村が強みを持った農産物を返礼品として送っていると聞いている。

Q：作付面積を増やして収穫量が増えると値崩れが起こることも懸念されるが、今後の作付目標についてどう考えているか。

A：新規就農者16名で1人当たり20アール程度を経営して欲しいと考えているため、全体で320アール程度の作付目標となる。値崩れへの対応として、ちはや姫にまで生育しなかったいちごについても、ちはや姫に合わせて値段が引き上げられるようなブランディングを行っていこうと考えている。

Q：新規就農者の増加以外にも、既存の農業経営者がいちご農園を開園していくことによる値崩れリスクもあるが、それについてはどう考えているか。

A：現段階では値崩れリスクはまだ少ないため、既存の就農者もいちご経営を始めたいと考えている。ちはや姫を生産していないいちご農家（16農家）とも、共同でブランド力を高めていきたい。

Q：増えていくと蜂が足りずに受粉が追いつかないこともあるのではないか。

A：蜂は世界的に減少傾向である。ミツバチの確保は今後の課題と考えている。

Q：河内長野市は農業用地が豊富なのか。新規就農者となるアカデミー生への農地の供給は追いつくのか。

A：最初にいちご農園を始めた農業者は、もともとナスの栽培を行っていたが、それを辞めていちご農園を営んでいる。いちごアカデミー生6名の農地確保は、河南町の農林委員会に農地のあっせんを依頼し、そこで紹介していただいた農業者から農地を貸していただいた。

Q：このあと現地視察を行うあまの農園は、「南河内いちごの楽園プロジェクト」に主導的な立場なのか。

A：あまの農園には、「ちはや姫の里」の会長をしていただいている。千早赤阪村に初めてきた新規就農者であり、アカデミー生の実習も受け入れていただいている。この後の現地視察では、アカデミーの受講生も来られるので、いろいろ伺っていただければと思う。



— 説明聴取後、現地視察を実施 —

○千早赤阪村森屋いちごほ場「あまの農園」

【質疑応答】

Q：いちごの苗の栽培も行っているのか。

A：いちごの苗は価格が高く、コスト削減のためにいちご農家で苗の栽培を行っていることが多く、本農園でも苗の栽培から行っている。また、年間の平均気温や標高等、生産環境によって苗の育て方を変える必要があるため、9割近くの農家で苗から育てられている。

Q：種子栽培も行っているのか。

A：苗の前の種子栽培も行ったが、個体間で品質差が出たり、味の品質が全体的に落ちてしまうため、苗からの栽培が最善と考えている。しかし、品種改良等で種子栽培がより容易になれば、いちご業界は大きく変化すると考える。また、その際には企業の投資等も膨らみ、いちご業界にとっても大きなチャンスとなるのではないかと考えている。品種改良に関して期待しているのは、大阪原産の品種を作ることである。

Q：ロボット農業技術の開発が現在進んでいるが、そういった技術は必要と感じるか。

A：いちご栽培においては、規模拡大や収穫の際などピンポイントで多くの人員が必要になることが多いため、そういった際に仕事を手伝ってくれるロボットがいれば助かる。

Q：仕事の内容としては何か。

A：苗をハウスに運ぶ作業と、その苗を植える作業があげられる。

Q：農と福祉の連携を大阪府でも積極的に行っているが、苗の運搬や苗を植える作業は、障がい者でもできる内容であるか。

A：十分に可能と考えている。少し力を入れた途端に傷んでしまう収穫等、非常にデリケートな仕事もあるが、その他の部分では助けていただける作業は十分にあると考える。

Q：6月から10月まではいちごの栽培や収穫はしていないのか。

A：その期間はしておらず、苗の育成をやっている。

Q：5年後の具体的な目標は何か。

A：面積は2倍にしたい。いちご栽培については、苗を植えてから半年で50回ほど農薬散布するのが一般的であるが、これを無農薬で育てたいと考えている。

Q：無農薬での栽培は現在も行っているのか。

A：昨年、苗づくりで農薬を使用したけど、苗を植えてからは使用していない。病気にはかかりやすくなるが、無農薬いちごへの消費者ニーズもあるため、病気に強いいちごの品種が大阪で開発されたら非常に嬉しく思う。



○台風 21 号被災現場

【説明内容】

- ・被災して倒壊したビニールハウスを撤去するだけでも大変な労力が必要となり、若い世代は体力もあるため復旧が進んでいるが、高齢者が所有しているビニールハウスの復旧は遅れている。
- ・高齢の農業者には、被災を機に農業を辞めようかと悩んでいる方もいる。



○道の駅「奥河内くろまろの郷」

【説明内容】

- ・J A南河内においても、台風 21 号による被害で、南河内の主力であるトマト、ナス、小松菜やオクラなどの農作物の収穫量が前年比で半減している。農家の被害は甚大なものであり、今後のご協力をお願いしたい。
- ・地域活性・交流拠点施設「奥河内くろまろの郷」は、地産地消の推進による地域の活性化等を目的に平成 26 年 11 月末にオープンした。施設内には、J A大阪南が運営する「あすかてくるで河内長野店」、地元農産物を使用したパン等や特産品を販売する「奥河内ビジターセンター」、地産地消レストランを備えている。
- ・「あすかてくるで河内長野店」の売上は年間 6 億円で、1 日あたり 1100 人の方々に来ていただいている。品目別で見ると、野菜が 30%、果物が 12%となっている。青果に比べて加工品の販売割合が高いのが特徴である（道の駅しらとりの郷・羽曳野にある「あすかてくるで羽曳野店」では、野菜が 43%、果物が 17%）。売上を時間帯別で見ると、朝が最も活気があり、午前 11 時をピークにその後客足は減少していく。トマトとナス、コンニャクイモなどの加工品や、味噌が非常に人気である。

